

【論文提出者】 社会文化科学研究科 公共社会政策学専攻 地域公共政策論講座  
地域連携政策論分野  
松本 貴文

【論文題目】 現代農村の社会変動と村落の再編

【授与する学位の種類】 博士（学術）

### 【論文審査の結果の要旨】

本論文『現代農村の社会変動と村落の再編』は、現代農村における基礎的地域社会としての村落に対する新たな社会分析方法を確立し、現在起こっている農村の社会変動と村落の再編の過程を明らかにすることを主題としており、理論的なレベルの検討においても実証的研究レベルにおいても非常に意欲的な力作である。

本論文の主旨は、次の如くである。従来日本の農村社会学では、近代化過程の徹底にともなう日本社会の大規模な社会変動の結果として、従来の支配的分析枠組みであった「家・村」という伝統的な分析枠組みの有効性の低下を指摘する、と同時に村落解体論的な理論的展開が主流をなしてきた。本論文は、この二つの理論的枠組みのうち「村＝村落」に焦点をあて、既存の農村社会学理論において主流であった村落を、地域社会の構造的な要因（「規則」）から定義する視点を廃し、機能的な観点から村落を再定義することによって、村落概念を現代農村の社会分析に有効な概念へと組み替え、さらに実証的な村落分析を行う中から、村落の現代的再編の可能性を模索したものである。

本論文の概要を示せば、まず、序論、第1章、第2章において、社会の変動期である現代において村落を分析する視点を探ることからはじめ、ついで第3章、第4章では、熊本県や宮崎県の過疎農村における実証調査をもとに現代の村落構造の分析をおこなっている。本論文の中核部分となる第5章、第6章では、熊本県および福岡県の農村を対象として、主体分析を中心に機能論的視点から、本論の主題である村落構造の変動過程の分析している。すなわち、構造的な変化をこうむっている村落でも、住民は生活上の必要に応じて機能論的な村落の維持を計っており、現代でも村落は住民にとって有力な社会集団として再編されていると結論付けた。

本論文において、以上の分析過程を通して引き出した結論の中で、次の2つの知見は非常に高い独創性がある。まず第1に、一部の村落は自身の機能を維持しながらも、社会構造の変化に合わせて開放性を高めていっていることの重要性を指摘している。村落は構造的に開放性を高め外部資源を導入することによって、村落の維持に役立っている。一般に村落は構造的閉鎖性をその特徴とすると考えられてきたが、現代社会における村落は、その機能を維持するために外部社会からの経済的・人的資源の導入がその条件となりつつある、と論じている。第2に、村落の維持・再編にむけての新しい主体や個別農業者の取り組みの意義が高まっていることを指摘している。先に論じた通り、農村を取り巻く社会構造の変化に伴って、村落はこれまでとは異なった資源の導入が望まれている。社会の変動期にあって、この資源導入のためにこれまで村落社会において周辺的な地位しか与えられていなかった人々の持つ社会関係や人的資本が有効に機能していることを論じている。以上の2つの知見は、単に理論的ではなく現代村落の実証的調査から引き出された独創的知見として、有意義なものと考えられる。

以上の論文に対して、審査委員からは、変容している村落の空間的地理的概念の把握が曖昧である。また、構造と主体性と「規則」の相互関連性の説明が弱いという指摘がなされた。しかし、本論文

が、従来の構造的村落把握から機能的分析方法によって村落を新たな視点から分析する枠組みを提示したことは、学問的にも非常に高い貢献であると評価された。よって、本論文が熊本大学大学院社会文化研究科の博士論文として適格であると判断した。

#### 【最終試験の結果の要旨】

平成23年1月13日に行われた口述試験の結果、申請論文が学位を授与するに足りる水準にあり、かつ十分な研究能力を有することが確認された。よって本委員会は、一致して松本貴文が博士（学術）の学位が授与されるに相応するものと判断した。

#### 【審査委員会】

主査	徳野	貞雄
委員	吉田	勇
委員	鹿嶋	洋
委員	松浦	雄介
委員	伊藤	洋典
委員	後藤	貴浩